

---

# 瑞穂の日常『お風呂で団らん』

九条 樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

瑞穂の日常『お風呂で団らん』

### 【Nコード】

N9895R

### 【作者名】

九条 樹

### 【あらすじ】

高校3年の桜井瑞穂。瑞穂の周りには両親を筆頭に個性的な人がいっぱい。その個性的な人達に振り回される瑞穂の日常生活をコメディタッチで書いたシリーズものです。

瑞穂にはゆっくりお風呂に入る時間もないのか！ということで、今回は家族団らんがテーマですが、桜井家の団らんはどんなものなのでしょう。

※このシリーズは、東北地方太平洋沖地震によって被災した方の心を少しでも励まそう、ということ企画された「Smile Ja

p a n.」への投稿作品です。これを読んで被災地の方が少しでも元氣の出る手助けになれば幸いです。

「瑞穂」

お母さんだ、台所からかな？

勉強中だった私は息抜きも兼ねて部屋を出る。

「どうしたの？」

お母さんは晩御飯の準備中のようだ。今日はおでんか。

おでんってご飯のおかずにならないからあんまり好きじゃないんだけどなあ。

「さっきお父さんから電話があって、帰るの遅くなるんだって」  
ってことは晩御飯が遅くなるってことか。

時計を見ると4時半。少しお腹空いてきたのに何時になるんだろう？

「風呂沸かしておいたから琢磨と一緒に先に入ってて」

「今から？ お父さんそんなに遅くなるの？」

「7時までには帰ってくるって」

「じゃ、ご飯食べてからにするよ」

せっかくお風呂に入っても、ご飯食べたりして髪に匂いがついたりしたら嫌だし。

「琢磨、瑞希は琢磨とお風呂入るの嫌なんだって。琢磨嫌われちゃったね」

料理をしているお母さんの足元で、ちよろちよろしていた琢磨に向かってとんでもないことを言いだす。

な、なんてこと言うのよ！

「そんなこと言ってないでしょ。今から入るのが嫌だって言っただけじゃない」

「琢磨、お姉ちゃんやっぱり嫌だって」  
なんでそうなるのよ！

琢磨を見ると今にも泣きだしそうだ。

仕方ないのでお風呂に入ることにする。

「琢磨、お姉ちゃんと一緒に入ろうか」

琢磨の手を取ろうとするとお母さんの足に隠れる。

「みずほ僕のこときらい？」

瑞穂じゃなくてお姉ちゃんでしょ！って言いたいところだけど、  
今怒ったらダメよね。

「嫌いなわけではないでしょ。お姉ちゃん琢磨と一緒にお風呂入りたい  
なあゝ」

「ホント？」

私は琢磨と同じ目線になるように跪き、大きく首を縦に振りなが  
ら「本当よ」と言う。

「じゃ、仕方ない。一緒に入ってあげる」

なんでいきなり上から目線なのよ。

でもまあここは素直にお礼を言っておこう。

「ありがとう」

そう言って琢磨の手をひき脱衣所へ向かう。

それにしてもお母さんはなんであんな言い方するのよ。

普通に『ごちゃごちゃ言わずに入りなさい』でいいじゃない。

「琢磨、頭洗ってあげよう」

「今日は頭いい」

「何言ってるの。いいわけないでしょ」

「今日はお母さんが洗わなくていいって言ったもん」

お母さんがそんなこと言うはずないじゃない。子供ってほんとに  
すぐばれる嘘をつくよね。

私も小さい頃は同じだったのかな。

結局嫌がる琢磨の頭を無理やり洗って二人で湯船に浸かる。

「そうだ！みずほ。僕お鮎が食べたい」

え？何？いきなり……

「お鮎？」

「お母さんがお鮎食べたいならみずほに頼みなさいって  
この前のお小遣いを当てにしての事か。

あれだけ貰ったんだからお鮎くらい別にいいけど。

「琢磨お鮎食べたいの？」

「うん」

「おお、お鮎か、それはいい考えた。今日の晩御飯はお鮎にしよう  
え？何？ってお父さん！

「お、お父さんなんで入ってくるのよ！」

「なんだ？入っちゃ悪いのか？俺の家だぞ」

「今私が入ってるじゃない！」

昔っから平気で入ってくるけど、一体どういう神経してるのかしら。

「お風呂は1人で入らないといけないルールでもあるのか？」

「そういうわけじゃないけど、お父さんは男でしょ」

「何が言いたいか分らん。男と一緒にだとダメなのか？」

「当たり前でしょ」

もうなんなのよ。このおやじは！

「琢磨も男じゃないか、琢磨はいいのか？」

「琢磨は子供だからいいのよ」

「じゃあ俺も大丈夫だ」

意味分らないし。

「大丈夫なわけないでしょ。お父さんは大人じゃない」

「瑞穂は俺の子供だ。だから俺が子供の瑞穂と入るのは問題ない」  
なんの屁理屈よ。

「そんな変な理論は通りません！」

「瑞穂はわがままだなあ」

っていうか今何時？帰ってくるの早すぎじゃない？

「きゃ、なんで湯船に浸かってくるのよ、狭いじゃない」

「じゃ瑞穂が出ればいいじゃないか」

「嫌よ、私が先に入ってたんだからお父さんが出て行ってよ」

「もう、うるさいわね。なに喧嘩してるの！お隣まで聞こえるわよ」  
お母さんだ。あまりに大声で言い合いしてるからか、脱衣所まできたんだ。

「違うのお父さんがいきなり入ってきて……」

「ってお母さん？何してるの？」

「もしかして服脱いでませんか？」

「もうみんな喧嘩はやめなさい」

風呂のドアを開けながらお母さんが私とおやじを諫める。

「おう美佐子も入ってきたか」

「お母さん、なんで入ってくるのよ」

「え？入っちゃだめなの？」

「私が先に入ってるじゃない！」

「なによ、ここのお風呂は1人しか入っちゃいけないって決まりがあつたの？」

ダメだ、この夫婦と話したら頭がおかしくなる。

「ちよっと狭いわね。お父さんもうちよっとそっちに寄ってよ」

こんな狭い湯船に4人も入れるわけじゃないじゃない。

たまらず私が湯船から出る。

「お、美佐子ここ空いたぞ。ここに座れ」

電車の席が空いたわけじゃないのよ！なにほのぼのと言ってるのよ。

仕方なく私は後でもう一回入ることにし、琢磨を残して風呂を出ようとした。

「おい！瑞穂待て」

「な、なによ！」

「怒ってるのか？」

「当たり前でしょ。」

「別に」

「ならいいが、鮭食べに行くから着替えておけよ」

まさかこんなことしておいて私におごらせるつもりじゃないでし

ようね。

「今からお鮎食べに行くの？今日はおでんじゃなかったの？」

そう言ってお母さんの方を見る。

「そのつもりだったけど、瑞穂がお鮎おごってくれるって言うからお鮎を食べに…」

お母さんの最後の言葉が終わる前にドアを思いっきり閉めてやった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9895r/>

---

瑞穂の日常『お風呂で団らん』

2011年4月14日08時55分発行